美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

7

2018 July/August

TAKE FREE

NO.48

特集

杉沢比山の夏

庄内憧憬

吉川忠英

アコースティック ギタリスト

Cradle 7 美しくなつかしい、日本をのせて。［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2018 July/August

平成30年7月1日発行（偶月奇数月発行）第8巻6号（通巻48号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2-59-3（コマツ・コーポレーション）電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市　月山から庄内平野の眺め

夏雲輝く　庄内平野

荘内銀行

庄内への想い
吉川 忠英

僕はこれからも、庄内の皆さんの豊かな笑顔に力と勇気を受け取って、次なる旅への活力にしてゆきたい。

「東京から世界へ！」と、とてつもなく大きな野望を持ってアメリカに渡ったのが1971年、あれからもう半世紀近くが経とうとしている。71歳になった今でも、曲を作りアルバムを作り、レコーディングに呼ばれ、旅を続けながら年間200本以上のライブをやり、毎年一作ずつ新作の〝ギター落語〟を覚え「井上寄席」で披露する…なんてことになろうとは、本人はもちろん、誰が想像したでしょう!? 神が在るとすれば、ここまで僕を見守ってくれた〝音楽〟いや〝芸能〟の神様に感謝せずにはいられないはずなのだが、実はいつも応援してくれていたのは、こんな僕のことを好きになってくれて、心配してくれて、困った時に力を貸してくれる仲間たち、そう！ 人間だったのです！

僕が初めて「みちのくギター旅」と題して庄内・酒田を訪ねたのは、2006年5月16日（火）のこと。秋田でライブハウスを営み、ヤマハでドラムを教えていた旧知の尾口武の紹介で、荒瀬正弘の店「ブルースヒロ」でのライブだった。店の前に車をつけると、数人の人たちが温かく出迎えてくれた。ヒロと僕が（どちらかと言うと）小さめの目を合わせ握手を交わすと、2人の間にビビビッ！ と衝撃が走った。「コヤツ、ただ者ではないな」というよりも、何かとても懐かしい幼なじみと再会したような、温かいビビビだったのだ。

それ以降、毎年巡礼のように音楽の聖地（メッカ）を訪問しているうち、「庄内おばこの会」会長の伊藤えりこ、酒田商工会議所会頭の弦巻伸とも親交が始まる中で、鶴岡市にも輪を広げていただき、松ヶ岡音楽祭を通して酒井忠順とご家族、そしてたくさんの市民の皆さんに〝吉川忠英の芸〟を楽しんでもらえるようになったことは光栄この上ない。温かい拍手とまなざし、鳥海山をはじめ悠々とそびえる山々に囲まれた豊穣な庄内平野に育つ作物、お酒、栄養満点の海の幸。「僕はなんで東京なんかに住んでいるのだろう?」と考えること幾度か！ 関東から庄内に引っ越したご夫妻の気持ちが手に取るようにわかる。

僕はこれからも、ライブはもちろんのこと施設や学校を訪問しながら、庄内の皆さんの豊かな笑顔に大いなる力と勇気を受け取って、次なる旅への活力にしてゆきたいと思う。岩ガキもいいなぁ。ラーメンもサクランボも…。あぁ！ すぐにでも行きたい！

そうそう！ 今年は10月に訪問できそうですから、日々精進している〝忠英芸〟を、ぜひ観に来てください！

梅雨入り前の東京自宅にて
〈文中敬称略〉

2017年9月15日（金）～17日（日）、酒田、鶴岡、遊佐の3会場で行われた「吉川忠英ライブin庄内」。
“聖地”酒田市・ブルースヒロにも多くのファンが集まった。

よしかわ・ちゅうえい／シンガーソングライター。1947年東京生まれ。1971年、伝説のフォーク・グループ「THE NEW FRONTIERS」のメンバーとして渡米。「EAST」と改名し全米デビューを果たす。帰国後、シンガーソングライター、ギタリスト、アレンジャー、プロデューサーとして活躍。アコースティックギターの第一人者として、中島みゆき、松任谷由実、福山雅治ほか多くのレコーディングやコンサートに参加。毎年、全国ツアーを精力的に行いながらアルバムをリリース、季刊「ACOUSTIC GUITAR MAGAZINE」（リットミュージック）ではコラムを連載。オンラインギタースクールも開講中。Masters Labo オト塾 http://www.masterslabo.com/

特集

杉沢比山の夏

国指定重要無形民俗文化財

暑さの残る葉月の夕べ。提灯が照らす鳥海山のふもとの集落では、鎮守の神社に人々が集い、境内では夕涼みの大人たちや、浴衣姿の女の子たち、駆け回る子どもたちが、日暮れを待ち、夜を迎えます。「かけ謡」が聞こえたら始まりの合図。番楽舞う誉の地、今年も杉沢比山の夏がやってきます。

参考資料 ＝ 遊佐町教育委員会『重要無形民俗文化財 杉沢比山資料集』（1981）／遊佐町教育委員会・杉沢比山保存会「杉沢比山 謡本」（1995）／菊地和博「『杉沢比山』番楽の特徴および検討課題」山形県民俗研究協議会『山形民俗』第31号抜刷（2018）／菊地和博「鳥海山麓に伝承される修験系芸能（番楽）の考察―秋田県小滝番楽・横岡番楽と山形県杉沢比山の比較検討―」東北文教大学・東北文教大学短期大学部 紀要 第8号 別刷

特集 杉沢比山の夏

地域×杉沢比山

はじまり、はじまり

鳥海山麓の西南にある遊佐町の杉沢集落では、毎年8月6日「仕組」、15日「本舞」、20日「神送」の3夜、村の鎮守である熊野神社を舞台に杉沢比山が舞われています。古くから伝わるこの舞はどのように伝わり、今に受け継がれているのでしょう。杉沢比山連中の代表を務める伊藤嘉惣治さんにお話を伺いました。

鳥海山麓の小さな山里で、毎年、お盆の時期に3夜演じられる杉沢比山。明確な記録は残されていないものの、杉沢は中世、鳥海修験（しゅげん）の山伏にとっての要所で、杉沢比山はその山伏たちが村の鎮守である熊野神社に奉じた舞といわれています。その後、鳥海修験の盛衰の中で、比山は山伏から村人へと伝わり、以来、村内で静かに受け継がれてきました。

転機が訪れたのは昭和5年。柳田國男の高弟といわれる民俗学者の折口信夫が杉沢を訪れ、比山に感動したことに始まります。すぐに民俗芸能学者の本田安次などが杉沢に訪れ、調査を開始。同年には舞い手が東京に招かれ、明治神宮鎮座十年大祭や靖国神社能楽堂で奉納公演を行いました。戦後も丹野正や須藤武子といった民俗研究者が杉沢に訪れ、調査活動を継続。昭和32年には山形県無形文化財に指定されます。

杉沢比山連中の伊藤嘉惣治さんが比山を舞い始めたのはちょうどその頃のことでした。「当時は村の青年団が盆の時に演芸会を開いて、踊ったり芝居したりしてたんです。じゃあ俺たちは比山を舞ってみっがと。それがきっかけです」。まだ村人のほとんどが農作業と山仕事に従事していた時代。夏になると舞い手の全員が公民館に集まって、練習したといいます。昭和51年には山形県無形民俗文化財に、53年には国の重要無形民俗文化財に指定。県指定以来、増えていた遠征公演は、和歌山、九州、韓国とさらに拡大していきました。「各地を公演してまわるうちに、だんだん自分の仕事みたいな気持ちさなってきて、面白くなてきての。それにこの頃さなると、それまで中心なってやってきた我々の親たちがみな年とってきて。面白みど一緒に責任感もついできたなや」。

現在、「杉沢比山連中」と呼ばれる舞・唄・太鼓・笛・鉦（かね）を行うメンバーは、小学校3年生から80代までの計25名ほど。毎年7月1日から練習を始めます。「比山は『へその穴から比山を見た者しか舞えない』といわれるほど難しい舞です。だから昔は夏になると毎日練習していました。今は大人が外に勤めに出て忙しいもんだから、練習は子どもを中心に行っています。それでも舞いたいという子どもは後を絶たないし、比山の保存会や実行委員会の協力がすごくあるからの。これからも受け継がれていくと思います」。

本番当日、熊野神社には出店が並び、小さな境内は村人たちであふれます。独特なリズムのお囃子が夜空に鳴り響くと、杉沢比山の開演です。

練習会場は杉沢比山伝承館。上級生から舞の型を教わり、伊藤さんや前代表の小野寺幸七さんから細かな動きを指導してもらう。

比山が舞われる晩、社殿内は囃子方や着付けをする人たちが待機する舞台裏となる。表側の舞台脇では舞い手のまねをして一緒に踊る子どもたちの姿が。集落の人だけでなく帰省客や鑑賞客が集う境内は、一気に夏祭り風情となる。

高度経済成長期に入り、後継者不足が心配されるようになった昭和40年、「比山体操」が創作された。地元蕨岡小学校では今も運動会などで踊り継がれている。

杉沢比山連中代表
伊藤嘉惣治さん

昭和15年生まれ。19歳から比山を始める。3年前に代表に就任。現在は唄を担当しながら若手育成に励んでいる。

特集 杉沢比山の夏

演者×杉沢比山

杉沢比山連中のいま

小学3年生から80代まで。杉沢比山は現在、舞・唄・太鼓・笛・鉦（かね）を担当する25名ほどで構成されています。中には何代にもわたって携わる家も。それぞれがなぜ地域の伝統芸能に携わるようになり、どのような思いで舞い続けているのか、皆さんにその思いをお聞きしました。

「みかぐら」「鳥舞」を舞う伊藤康男さん（父）と、「大江山」を舞う伊藤卓さん（息子）。

「杉沢集落の中でも芸能に適した血統の家があての。1軒から何人も舞てる家があります。うちも代々やってきて、せがれも孫も舞てるもんの」。そう話す小野寺幸七さんは、杉沢比山連中の前代表です。20歳の時に比山を始めて以来60年、さまざまな演目を舞ってきました。現在は舞を後進に譲り、囃子方（はやしかた）として鉦を担当しながら、現代表の伊藤嘉惣治さんと共に子どもたちの育成にあたっています。

そんな小野寺さんの指導を受けている一人が孫の拓己さんです。拓己さんは2つ違いのお兄さんに続き、小学3年生で比山を習い始めました。

「祖父や父の姿を見て育ったこともあり、比山は自分たちがつながなければという使命感があります。でも興味を持ったきっかけは、大人が舞う姿を見てかっこいいと思ったからです。いずれは小さな頃から憧れている『猩々（しょうじょう）』を舞いたいです」。

しかしその一方で、高校卒業後に進学や就職などで地元を離れてしまう舞い手も多くいます。その中で小学3年生から切れ目なく20年近く舞い続けているのが、伊藤卓さんです。祖父の新さんは「翁（おきな）」をはじめとする舞の名手で、今は実父の康男さんと比山を支えています。昨夏は卓さんが舞う舞台脇で、5歳になる息子さんがまねをして踊っていました。「私もそうでしたが、小さい子どもはいつの時代も扇を持ってまねをしたがるようで、息子は夏になると練習会場にも見にくるし、比山のDVDを見て毎日熱心に踊っています。そのモチベーションが続けばいいんですけどね」。

現在、杉沢の子どもの数は10人ほど。かつて舞い手は杉沢生まれの者といわれ、青年団に入ると始めた時代もありました。しかし少子化を背景に継承の仕方を見直す動きもあり、2年前からは叔父の家に養子となった、埼玉県出身の渡辺康博さんが「しのぶ」を舞うようになっています。「子どもの頃から夏休みになると毎年父の実家に遊びにきて、祖父の舞う比山を見ていました。まさか自分が舞い手になるとは思わなかったけれど、杉沢にきたらすぐに声をかけてもらって」。そう話す渡辺さんは、伊藤代表が驚くほど熱心に練習を行い、その夏には舞台へ上がりました。今後は新たな演目にも挑戦したいと目を輝かせます。

小野寺幸七さんは話します。「杉沢は昔から芸能の盛んな集落だったこともあって、今までは自然に舞い手が現れてきました。でもこれからは生まれなど関係なく、できる人に頑張ってもらわねばと思います」。

比山を舞い始めて3年目の渡辺康博さん。1年目と2年目は「しのぶ」を演じた。

伊藤康男さん

卓さん

「シーズンになると5歳の息子が熱心にまねします」

渡辺康博さん

「新しい演目にも挑戦していきたいです」

小野寺幸七さん

拓己さん

「孫には高校卒業しても続けてもらいでの」

「景政」を舞う小野寺拓己さん（孫）は、鶴岡工業高等専門学校の1年生。小野寺幸七さん（祖父）は囃子方として鉦（かね）を叩く。小野寺家は4代にわたって比山を舞う。

特集 杉沢比山の夏

特色×杉沢比山

修験と芸能の郷

杉沢比山は本来「比山番楽」といい、集落の鎮守、熊野神社に奉納される民俗芸能です。「番楽」は神楽の一種で、鳥海山の北麓と南麓にあたる秋田県と山形県に伝えられています。山形県内には最上地域にもいくつかの番楽芸能がある中で、遊佐町の杉沢比山が持つ特徴を、菊地和博先生に伺いました。

文学博士
菊地和博さん ＝語り
東北文教大学短期大学部 総合文化学科特任教授。近年は鳥海山麓に伝わる民俗芸能について調査研究。昨年、杉沢比山の現地公演（本舞・8月15日）で司会進行、解説役を務めた。

杉沢比山のような「番楽」といわれる芸能は、山形県の遊佐町の他に、真室川町、金山町、秋田県にかほ市と由利本荘市などの各地に伝えられています。いずれも発祥には鳥海山の修験者（山伏）が深く関わったとされ、杉沢地区にもかつて修験者が集住し、別当坊が置かれ栄えていたという記録が残っています。

東北全体の神楽や番楽から見ても、杉沢比山のリズムとメロディーは抜きん出て洗練されています。その独特の基調に則った舞は、直線的で動きが素早く、見ていてスカッとして魅力的です。杉沢比山では、太鼓の打ち手が1人で2つの太鼓を鳴らして軽妙なリズムを刻みます。かけ声も独特で、笛も演目によって使い分けるなど構成はじつに細やかです。また、楽器や唄を担当する囃子方が、舞台に出ず幕内で演奏を行うのも他の番楽と異なる点です。

杉沢比山のリズミカルな楽曲は、明治以降の現代的な西洋音楽の流れを汲んでいるようにも聞こえます。しかし「杉沢比山体操」の伴奏者である土岐田梅子さんによると、特徴的なその拍子は「古典音楽の特徴」であるとして、明治以前に創作された楽曲の可能性を示唆しています。

（写真左上から時計回りに）「翁面」。蕨折や橋引、大江山に登場する「女（姫）面」、大江山と高時の「鬼面」。蕨折と橋引の道化役の「ガンゲツ面」。

熊野神社の拝殿前に設けられる舞台。現在は可動式だが、昔は石組の上に木で骨を組み、葦葺きの屋根をのせた。舞台と楽屋の間の菊花の式幕や、鶴亀に日月を描いた横幕は昔と変わらない。

また、演目に着目すると、一般的に神楽や番楽には〝祈り〟の側面があり、舞台に神様をおろして演舞する意味合いから『獅子舞』を神様の依り代として演目に含みます。しかし、杉沢比山には獅子舞の演目がありません。「御頭舞」という獅子舞が8月15日の「本舞」が始まる前に奉納されるのみです。杉沢比山では神おろしとして、演舞の開始を告げる「かけ謡」を神歌としているものと考えられます。

他にも「三番叟」を少年が舞うことや、「しのぶ」で太鼓に座る仕草が見られるなど、演目一つ一つに独自の所作が見られます。

舞い手の鮮やかな手足さばきは杉沢比山の見どころ。この装束の武士舞は早舞（はやまい）ともいい、リズムが速く、動きも男性的。

囃子方は口上、唄、太鼓、笛、鉦（かね）で構成。大小2つの太鼓で独特のリズムを奏でる。唄い手は式幕の切れ目から演技の様子を見て調子を合わせる。

杉沢比山は、中世には存在していたと考えられていますが、中世の修験系の舞はどこか単純明快で素朴で、芝居じみていません。杉沢比山は、他の番楽と比べて演技や楽曲に明らかな違いがあり、リズム、振付、演出、どれも斬新さを感じさせます。おそらくいつかの時代に、優れた演出をした人物がいたのかもしれません。

多くの修験者が行き交い、芸能に親しむ土着の文化のもとで、独自に磨かれた杉沢比山。その舞と音は、人々を楽しませようとするエンターテインメント性にあふれ、土地の気風を表現豊かに伝えています。

杉沢比山に伝わる全24曲のうち、現在は14曲が8月に奉納されています。鮮やかな舞の型、独特のリズム、昔人も熱中した娯楽に満ちています。

曲目紹介

特集 杉沢比山の夏

●番楽（ばんがく）

「ばんがくたろうや岩屋に籠（こも）って番楽踏むこそ目出たさよ」番楽を舞うめでたさを祝う、舞台鎮めの舞。

●三番叟（さんばそう）

五穀豊穣を祝う舞とされ、杉沢比山では古くから少年が舞っているのが特徴。足拍子がリズミカルで動きが大きく、鈴や扇子で巧みに間合いを取るなど見どころが多い。

●みかぐら

雌雄2羽の鳥が仲睦まじい舞を見せる。鳥兜をつけ、振袖に帯を垂らした姿で左右対称に舞う。「みかぐらや みかぐらや いつ立ちそめしの神のみかぐらや」の出歌には神迎えの意味があるとされる。

●鳥舞（とりまい）

高天ヶ原の天岩戸が開かれ、夜明けを告げた雌雄2羽の鳥がたわむれる様子を演じているとされる。舞の手は序盤ゆったり、次第にリズムが速まり、複雑な構成となっている。

●翁（おきな）

能楽の演目としても知られ、神聖視されている舞。天下泰平、不老長寿などを願う。厳かな舞だが、後半は太鼓と掛け声にあわせてリズミカルになる。その変化にも注目。

●景政（かげまさ）

前九年の役、厨川の戦いで源義家の家来、鎌倉権五郎景政が鳥海弥三郎（安倍宗任）に左目を射抜かれる。景政は矢を抜かず3日間、弥三郎を探し求め、ついに仕留める物語。最初に景政が、次に弥三郎が登場し、刀を抜いて戦う場面を展開する。

●蕨折（わらびおり）

娘は親孝行のため山へ蕨取りに行くが、雪解け水で川水が増し、戻れなくなる。そこに老いた船頭が現れ、娘は妻になる約束をして船を出してもらう。しかし娘は暇がほしいと去り、一人待つ船頭のもとにドサが現れる。娘の行方を尋ねたところ「天帝の妃となって楽しく暮らしている」と嘘をつかれ、船頭は落胆し、川に身を投げる。最後に娘が現れ、ドサは娘を自分のものにできたと喜んで幕の中に消えていく。

曲目紹介

特集 杉沢比山の夏

高時（たかとき）

鎌倉幕府第14代執権・北条高時が、田楽法師に化けた烏天狗になぶられる場面。山形、秋田の番楽で高時を演じているのは杉沢比山のみ。

曽我（そが）

鎌倉時代初期、曽我の十郎と五郎の兄弟が父親の仇を討つ物語。勇壮でキレのいい舞の姿は他の番楽にはなく、杉沢比山の舞い手も好む武士舞の一つ。

景清（かげきよ）

平家の侍大将だった景清は、平家の滅亡とともに、源氏に捕らわれ、その後、食を断って死んでしまう。後世にその勇名を伝える舞。

橋引（はしひき）

深く広く橋も架けられない名取川。川上に立つ杉の木が、橋架けを叶えるという熊野詣の乙鶴御前に恋をする。やがて杉は切られ橋となる神婚説話。ガングツ面のドサ役に注目。

しのぶ

奥州布川、高館合戦で、義経側について奮闘した武将、信夫の太郎景時。その戦いの様をたたえている。劇中、太鼓に腰を掛けて舞う珍しい仕草が見られる。

大江山（おおえやま）

源頼光、渡辺綱の2人の武将が大江山へと向かう道中、花園中納言の娘が現れ、山にすむ鬼たちを成敗してほしいと言い残して去る。2人は闘いの末に鬼を退治し、都に平和が戻るという筋書き。

猩々（しょうじょう）

山形、秋田の番楽の中では杉沢比山だけが現在も演じている。猩々の装束は、大酒飲みで姿形が真っ赤だったという伝説にちなむ。刀を体に当ててでんぐり返しをするなどアクロバティックな演目。最後に逆立ちをしたまま舞台を3周し、幕に入る。

公演情報

杉沢比山 現地公演

日時 **8/6(月)〈仕組〉** 19:00〜21:30
8/15(水)〈本舞〉 19:00〜22:30
8/20(月)〈神送〉 19:00〜21:30

会場 **熊野神社境内**（遊佐町杉沢字宮ノ後23）

※入場は無料です
※3日間で演目が一部異なります
※時間は前後する場合があります

マルハチの夏野菜 山形のだし

山形県内陸地方の郷土料理を
いちはやく全国区に広めたマルハチの
夏季限定「山形のだし」は
清涼感倍増で暑い夏にぴったり！

「山形のだし」の夏野菜バージョンは夏季限定商品である。大きめに粗切りしたキュウリとナス、ミョウガ、ネギに、通常の2倍の青ジソを混ぜてあり、さわやかな風味が暑い夏にぴったりだ。

そもそも「だし」は内陸地方の郷土料理である。内陸では昔から夏になると、畑にある野菜を細かく刻み、しょうゆやめんつゆをかけて食べてきた。家によって昆布やオクラを入れてとろみをつけるなど食べ方はそれぞれで、作りたてを鮮度が良いうちに食べきる。そんな昔ながらの内陸の家庭料理を、いつでも誰もが手軽に食べられるようにしたのが、マルハチの「山形のだし」である。

同社にとって今や看板商品である「だし」だが、20年近く前に内陸出身の女性スタッフが商品化を提案した時は、庄内ではまったくなじみがなかったことからすぐに却下されたという。しかし彼女の並々ならぬ熱意が会社を動かし、商品化を開始。保存料や着色料を使わずに鮮度を保たせるため、往年の漬物技術を駆使し、「山形のだし」として販売を始めた。だがそう簡単に売れるわけではない。その時に立ち上がったのが、首都圏のスーパーで店頭販売を展開し、「漬物王子」と呼ばれるようになった庄内人スタッフだった。次第にマスコミにも取り上げられるようになり、一躍ヒット。内陸人と庄内人のそれぞれの熱意が実を結んだのだ。

ちなみに私は幼い頃から夏になると内陸出身の母が作るトウモロコシ入りの「だし」を食べていた。最初からとろみや味付けがされている「山形のだし」と異なり、しょうゆをかけて食べるタイプだ。うん、どちらもうんまい山形の夏の味だ。

5月～8月の夏季限定商品「夏野菜　山形のだし」は、全国各地のスーパーで絶賛販売中。他、通年販売の「山形のだし」は通常の1個130gサイズと、50gの小分けサイズ3個セットの2種類があり、いずれも賞味期限は9日間。またマルハチの公式HPでは「山形のだし」を使ったレシピも公開中！
http://maruhachi.n-da.jp/
株式会社マルハチ ☎0234-43-3331

（取材・文　長谷川結）

庄内俳句紀行

山開きの摩耶山を歩く

すずやかな風が
庄内平野の青田を駆け抜ける頃になると
青葉若葉の山は元気いっぱいになる。
麓から眺めるのもよいが
そこに足を踏み入れてみたくなった。

季語
山開き（やまびらき）
その年初めて登山を許すこと。またその日のこと。

山頂から粟島と佐渡島を望む

新潟県境に近い標高1019mの摩耶山では、5月下旬に春の登山会（山開き）が行われる。3つある登山口の一つ、温海地域側にある越沢口へと向かった。「そば処 まやのやかた」前では山開きの神事が行われていた。毎年地元から選ばれるという摩耶姫とともに、今年も登山者たちの無事な山行きを祈願する。

神鏡の曇り晴れたる山開

―高橋将夫

静かな杉木立の登山口から入ると、切り株に苔の花が一斉にその手を伸ばす。渓流の水音に沿って進めば、岩間の湧き水からグウッ、グウッとくぐもった蛙の鳴き声が森に響く。足元に届く木漏れ日に、稚児百合が俯き咲いている。冬は雪に覆われ、人を寄せ付けなかった山も、春になり芽吹いてより、日を追うごとに若葉の色が濃くなっていく。山毛欅の殻を敷き詰めた雪渓を進み、橋を渡ると、沢の水は勢いを増すばかりだった。

渓流と新緑

峰渡る風は白緑夏の蝶

―あべ小萩

視界が開け、山頂に続く緩やかな道に、岐阜蝶が2頭じゃれ合うように飛んでいた。眼下に日本海が広がり、粟島の奥に佐渡が見える。「磐梯朝日国立公園の大展望台」ともいわれる山頂からは、鳥海山、月山、眼下に荒沢ダム、そして以東岳と360度遮るものなく眺望できる。登山の最大の魅力は、この壮大な展望と爽快感かもしれない。日常の生活から離れ、自分を俯瞰してみる瞬間でもある。

岐阜蝶

山彦を呼び出してゐる山開き

―小野伶

帰り道、同じ道でも見える景色には違いがあった。山を降りてもう一度、麓から摩耶山を振り返った。山頂に辿り着くまでに感じたこと、出会った数多くの生物たちの営みへの感動が重なる。今度は紅葉の頃にまた歩いてみたい。

山頂からの眺め

山彦はいづくに寝まる青葉闇

―上田五千石

二輪草の小径に、片栗や一華も姿を見せる。対岸の崖には山躑躅が色を添えていた。「小浜の茶屋跡」に足を止め、絹のような滝に汗ばんだ肌を落ち着かせた。ここから先は山毛欅の森が続く。赤翡翠が谺し、道に沿って大岩団扇や大岩鏡が賑やかにおしゃべりに興じている。目線を上げると大葉黒文字や空木の花。振り返ると下からは見えない朴の花が満開であった。時間を気にかけることなく心が動けば佇み、感銘を収めた。

大葉黒文字の花

◆摩耶山 山形県指定名勝（昭和36年）

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）
写真協力＝間真由美